

昭和二年

一月元旦

除夜の鐘の音と共に肅々と黎明は来た。蘇った昭和二年、在舎生七名乾盃して健康を祝ふ。

時田邨君感冒にて病褥にあるは痛まし。早く恢復を祈る。

在舎生総てが今年こそは華々しく働きたいものである。同時に考へたいものである。餘りに諸子は萎縮している。もっと延びようではないか。目につく欠点を挙げれば  
遊戯精神に耽溺する人のあること。

自我主義を如何なく發揮する人のあること

運動せざる人多きこと。ほらふき多き事

労働を厭う者多きこと

互に慎むべき欠点だ。大いに反省を要する。

もっと※※在舎生が公德的に行動することを切望する。“人の身にもなって見ろ”という言葉を常に頭に置く事だ。而も稍々もすればエゴイズムに捕われる傾向をもつのが人間、打勝つのが人道だ。団体生活者よ、もっと融合し給へ、美しく生き様ぢやないか。

一月二日 野村、平戸両君手稲を征服す。

一月五日 野村氏帰省され舎益々淋しくなる。

一月六日 多勢氏根室より帰舎せらる。

一月七日 宮脇氏昨夜帰舎されたるも風邪の為め起き上れず。苦悶激しき為、奥田氏を招じて見たるに左程のことなしとて安心したり。時田氏の風邪も漸く遠のきたる様にて結構と云う可し。インフルエンザ欧州を風靡すと報ず。そんな餘計者の日本に来ぬことを祈る。

一月九日 石橋道助、野村虎男両氏帰舎さる。

彦坂重信氏亦陸奥より帰舎せらる。

歌留多近時盛んとなる。進歩の見る可きもの平野、中川、多勢の三氏となす。但し勿体ぶる者あるは禁物。

一月十日 予農二年小野寺君入舎せらる。

一月十四日 九号に集って歓談に耽る。時田、宮脇氏皆恢復したるは喜ばしい。

一月二十日 莊保忠三郎帰舎、因に君は新文芸部係。

一月二十三日 平戸、笹部、野村、宮脇の四君奥手稲登山。一同一層色黒く、中には悲観せる者あり。平野三夫君二十三才本日誕生日に付き十一号に寄り一同祝の小宴を開く。

一月二十四日 宮脇君全快祝七号室に行はる。

一月二十五日 本日雪少しく降る。一層寒く北国の情緒いよ※※濃厚となる。小生夜、鈴木限三氏宅訪問、帰路愈々寒く感ず。

一月二十六日 秋田寮とのピンポン試合二月五日と決定。選手に付きては謀議中。外は相変わらず白い。何時かの時、先生が云われたように「この札幌の冬は、実にロシア小説を

読むいゝ冬だ」……実に隱鬱だ。ちょうど深刻味のあるロシア小説の様に。

一月二十七日 本日余、馬術に行き道にて人をかすり、こかす。幸に先方善人なるを以つて余に親切なる訓辞の後、易々として余をゆるせる。余今更に余の若さをさとる。

石橋、柴内の二君秋田寮にかけ合ひに行く。

石橋君もまれたらしく数日前の元気に反し意気消沈の形。

一月二十八日 夕方より少々降雪あり。

夜月次会あり、宮部先生、奥田様、亀井先生等雪中にかゝわらず御出席。

開会の辞 莊保忠三郎簡単にしてやむ。

時田君 小野寺君の歓迎の辞をのべ、あわせて此の新年に対する感をいさゝかのぶ。

平野君 明治、大正、昭和の各時代を一見して其の各々に政治的方向の意見をのべ、

且間に社会制度の悪弊を述べいさゝか興奮す。然して最後に昭和は新しき建設と破壊との時なる事を述べ局を結ぶ。

大谷君 例により準サイエンティストとしての立場より吾等の生活を批判し、いさゝか自分の札幌に対する感をのぶ。

中川君 蹶起して大谷君の意見にいさゝか皮肉をのべ、大いにその人間味の欠乏をうながす。

莊保君 平川君が賀川服の通たる事を紹介す。

平川君 賀川服の深き説明に入り、吾等の生活改善を高唱し、最後に消費組合を紹介し美国に於て其発達最も著しきを現す。

**We have a little better than when we found it** の言を残して去る。

奥田様 先輩小林君を联想され同郷人の小野寺君の入舎に歓迎の辞をのべらる。

今年のモットーとしてヴェートーヴェンの言を引かれ、又自分の経験よりの二、三の偶話をせらる。

亀井様 雑誌より例を取られ、米国に於けるが如き有名無実の発達即ち、むやみに急ぎて実にとぼしき事のいやしきを罵倒さる。

宮部先生 先生は今までモットーを作られし事なく、今年初めて **Silence** なるモットーの下に生活せんとする事をのべらる。

内村鑑三様よりの便りより、昔の学生時代を联想され以後話のなき中は、きっと昔の学生時代の話をせんとちぎらる。

第一回として先生の北海道に來られし動機及其の当時の模様を滑稽話され、談、学校到着時の札幌市の様子に及びし時、時すでに十時を過ぐる事二十分、即ち続編を以後にゆづりて去らる。

佐々木君閉会の辞

会后茶話会を開き、久し振りにへボヌキをやる。東側の勝利となる。後有志者、奥田氏を相手にカルタ会を開く。雪かなりひどく近日稀れに積る。

委員笹部、杉本、佐々木、莊保君。

一月二十九日 医科本科二年目赤岡君入舎さる。夜佐々木君都合上山鼻方面に転居せらる。  
夜小さき会合ありて彼の挨拶あり。

二月一日 浜本君「ルッター研究」を寄附す。

二月二日 平戸君風邪におそわる。

二月三日 大谷君風邪におそわる。

二月四日 兩人まだ治らず。平戸君止めてもきかず学校に行く。然し本人少し元気なり。

二月五日 秋田寮とのピンポン試合本日午後六時より秋田寮にて行はる。当日の試合の成績例年の如く良からず。只柴内君のみ見るべきものありて、実に柴内君は優退し後、滴三人を倒し更に大将伊藤君と接戦を交へたり。当日の成績左の如し。(略)

前試合終了後茶菓の饗応を受く。寄宿にても「しるこ」を出して一同に増々練習せよと激励す。

二月六日 笹部及び余は奥手稲、杉本、野村、宮脇の諸君は手稲ヒュッテに行く。

二月七日 本日我等臣民与りてつゝしむべきの日、実に大正天皇の御大葬日なり、午後三時を期し吾等体操場にて奉悼の式を行ふ。

舎長宮部先生總長代理にて悼辞を読まれ、又コーラス団の奉悼歌あり。場外にかがり火をたき、いかにも北国のメランコリーに富める冬を一層深からしめたるの感あり。

式後、余は舎に引きこもりて謹慎の意を表す。

二月十二日 本日夕食後より舎内ピンポン大会を開く。一同奮闘し仲々面白く一夜を過したり。勝利は終に白軍に帰し、抽籤試合は柴内君の手に帰したり。各々の成績左の如し(略)。白軍にはチリ紙一帖づつを呈し、優退者にキャラメルケーキづつを呈す。

優退者 大谷、石橋、柴内、多勢、

試合後、ウドン、ソバの饗応あり、一同満腹にて寝に付く。

二月十三日 本日運動部主催にて手稲ヒュッテ行を挙す。参加者は平戸、笹部、彦坂、莊保、柴内、野村、宮崎、杉本の各君なり。一同元気なりしが、帰途宮脇君スキーを折り、重ねて彦坂君が足をいためしは残念なる事なり。

二月二十六日 本日、時田、多勢、宮脇、浜本君の送別会及赤岡君入舎歓迎会を兼ね月次会を開く。来賓として宮部先生、鈴木先生、亀井、笹部、今井、奥田の諸先生始め、中島氏、土井君来りて盛会なりき。

五時半より宴会を開き、七時半より普通月次会の如く講演会に入る。途中卒業生を中心をして写真をとる。

開会の辞

在舎生挨拶

赤岡君挨拶

卒業生、時田、多勢、宮脇、浜本君答辞

在舎生より副舎長たりし時田君にプロフェッサーバググーケ贈呈。

先輩諸氏の激励の辞及注意数々

先生の御話

一同奮ひて各人の健康と四君の前途を祈る。

閉会十時半。

三月三日 彦坂君手稲登山後しばし休学して療養せしが、数日前より杖にすがりて歩くを得、この日を期して一時帰省す、一同駅まで彼の姿を見送る。

三月九日 予科試験第一日目、石橋君微積悪くひどくしょげる。関西大地震大坂に被害少きとの事。只日本海方面は可成多大の被害を蒙りたり。

三月十一日 庁立に失敗〔女学校の受験〕して、皆の物が「藤」〔ミッション系女学校〕へはと思ひしミサちゃんは又残念ながら失敗したり。彼女の心中察するに余りあり。

三月十四日 今学年最終の月次会を開く。来賓は宮部先生只御一人にて、いさゝか淋しき感あり、然れども舎生の勢ある演説により非常に盛大なりき。

開会の辞 平野三夫君

副舎長 時田郎君の最後の挨拶

舎生一同激励の辞

この間、たま※※笹部君より寄宿舍基本財産に付いての論出で、結局後の宮部先生等の賛成の意により、保険に加入して火災等不時の変に具ふる事とす。

副舎長改選、平戸勝七君大多数を以て当選し、新旧副舎長の挨拶の取り換えあり、次に、宮部先生、平戸君及時田君に対して一寸と感想を述べられし後、笹内君提出の寄宿舍財産の事に及ぶ。結局、今年三十年を期し、何か基本財産を設けん事を計ることとなる。

予科生は未だ試験終らず九時に終る。

委員、平戸、平野、大谷、莊保。

三月十五日 本日中川君突然朝の汽車にて帰る。けだし以前より帰京の計画ありしが、言はざりし様なり。一同起き出で、おばさんより聞き、おぼろに帰りを確かめし次第、けだし憎き仕打なり。

三月十七日 本朝七時笹部君、莊保君或ひは帰省の途に、或ひは旅行の途に着く。正午赤岡君は旭川方面へ旅行に出掛けた。莊保君より「科学大系」及び「デカメロン」を贈られた。

三月十八日 宮部先生の御招待にあづかり、舎生十二名及び亀井、今井、笹部、奥田の諸氏と、あるひは歌留太に、あるひはトランプに、又其の後はレコードに愉快的な夜をもち得、お寿司の御馳走もうれしかった。

小野寺君は今夜九時の急行にて上京せられた。

三月十九日 朝平川君、夜柴内君夫々帰省の途につく。

三月二十日 朝大谷君帰省。

土が見えた。新しき土が。かげろひて。それも十時街のみとは云え……、春が来たんだ。

当地独特の馬糞の流れが、歩く足さへつけられない程に汚ない。しかし陽天を見れば心がおどる。文芸部の図書整理をなす。所在不明の書籍十八冊。火の気のない冷い所をいとひなく手伝ひ下され...野村君に感謝の意を表す。

三月二十二日 文芸部委員より一時交替をなす。平野君、住めば都かは知らねども彼方遠野の町にて帰り行きたる。樋浦君夜帰省兼旅行とて出発さる。

三月二十三日 残りたる者僅かに時田、宮脇、杉本、浜本、石橋、平戸、野村君の七名となりぬ。寂として声なし。時にあがる蛮声の内に尚哀れなる懐郷の情誘はる。

されど家路さして、あはてふためき帰り行く若き昔こそなつかしき。今日午後、予科、専門部の所属発表ありたり。

三月二十五日 今朝、杉本良次君遂に帰省さる。快晴にして爽快なる事此の上なし、部屋に止まるも惜しき程なり。静かな舎の中にぼつねんと瞑想する時も無いと、貴い思い出となるにやあらむ。次第に寂れ行く舎、今は思ひ思ひ楽しき家庭の人となりて甘き蜜をなめ吸ひ居る友よ、永久に幸あれ、永久に家庭の愛に生きよと祈る。

三月二十六日 午後〇時十六分にて野村虎男君旭川に向はる。

三月二十七日 午前七時半の汽車にてジャン、平戸勝七君帰省の途につかる。

三月二十八日 午後〇時十六分の汽車にて舎に於ける遊戯勧誘係、石橋道助氏滝川の親類を慕ふて行きたる。

三月二十九日 朝来、風邪の気味とて青森行を見合わせる筈であった宮脇君、遂に意を定めて夜九時五十分の急行にて出発さる。今晚、卒業は東寿司にて賄部を饗応す。

三月三十一日 晴れの卒業式に参列する。

夜、時田君九時五十分出発さる。残る浜本独り、便所に行くにも、どきりとする位の静寂さである。

寄附 雲の柱（合本）白根強一

抵抗養生論 濱本喜一

四月一日夜 今度、土木専門部を目出度卒業せられし浜本君が就職地へ向かひ思い出多かるべきこの札幌の地を去られし由。

浜本君帰省によりて在舎する者無く為に十日までの日誌が記せられて居らなかった、故に宮脇君のその間における赴任地よりの帰舎、帰省も明瞭でない。

四月十日 夜、柴内、赤岡両君帰舎。

四月十一日 朝、樋浦君、彦坂君帰舎。

小生即ち平野及び平戸君は青森にて偶然にも一緒になり、夜九時四十分の汽車にて帰舎す。

四月十二日 九日から工学部の授業が始ったとかで樋浦君及び昨日から始ったという彦坂君が学校へ。平戸君も柴内君も皆学校へ様子見に出かけ、舎に残る者小生独り、無聊に苦しむ。夜十一号室に集りて平野氏及び彦坂氏の土産なる練羊かんを頬張る。

九時の汽車で笹部氏新角帽姿にて如何にも嬉しげな顔をして帰舎せらる。

四月十三日 土井垣嘉君入舎せらる。現在医学部予科三年在学、落ちついた、快活そうな人なり。

四月十四日 春だ春だ、俺は春の清新な喜びに浸ることが出来る春だとでも叫びたい程風もなく良いお天気様だ。平戸、笹部、彦坂の諸氏と郊外散歩へと出かけた。肥料が与えられた土、馬場牧場の牛の放牧、小牛ヶ岡に寝そべると、全てが春という感じを与えてくれた。今日かねてより契約中だった火災保険の契約証書が送られて来た。掛金五十六円で七千円程取れる訳だ。午後二時半頃、宮脇君帰舎せらる。よって小生の不在中の舎生移動が全部解った。彼の談によると、宮脇君は二十九日夜青森に向ひ、三十一日夜帰舎し、その後四月二日帰郷せる由なり。今日、平戸、笹部、彦坂の諸君と庭球コートの本年度の使用初めをやった。

久方振りの庭球、球がどん※※小川に入りて流れる。が運動後の風呂上りの快さは何とも云えぬ。

四月十五日 何かしら昨日の晴天が夢のやうに思はれる程、今日は嫌やな冬の一日のやうだ。朝からどんよりとして冷氣身に浸む、午後から雨になった。

四月十六日 昨夜の雨が雪となりてあらはれた。寒さもとくに感ぜらる。夕刻に入り、また雨となった。今度、農予へ入学せられたる赤松速雄君入舎せらる。夜小野寺君帰舎せらる。

四月十七日 午前〇時頃平川君帰舎さる。

予科一年大塚憲郷君、田島嘉雄君、川原鳳策君、本間憲一君、林実一年中世古謙一君入舎せられる。晚七時から笹部、平川両君の新角披露の御馳走あり。席中、例年にもあるやうに各自自己紹介をなして初対面の挨拶にかへ、談笑裡に九時頃解散す。

四月十八日 朝七時の急行にて中川一郎君帰舎せらる。恥かしいと見えてか角帽を被らず汚い予科帽をつけて来た。午後から舎生一同でローラーを引き、庭球コートを修繕した。新入生学校へ出掛ける。

四月十九日 予科（農）一年関谷正君、予科（工）一年畑賢二君入舎せらる。本日入学式挙行せらる。夕食後ローラを学校へ返す。

四月二十日 降るなら雨らしく降って呉れれやよいのに、思い出したやうにぼつり※※と来る。雨傘を持とうか持つまいかと迷うだけでも十分嫌になるやうなお天気だ。

午後七時三十五分本年林学実科を卒業せられし宮脇賢太郎君は、従地青森に向け出発せらる。

四月二十一日 今度農学士となられし時田君、本朝七時帰舎、夕刻退舎し二六館へ移らる。

四月二十二日 チューリップの葉も一寸程に伸びた。二本のサフランの花も開けり。

今日は天候晴れ、風も徐に來り眠気を覚ゆる程なり。庭球に、キャッチボールに今日の日を暮れる若人も、夜に入れば沈静、机に向ひ、舎内に人なきが如し。此れ今日の寄宿舎にして又昨日も同じ舎の有様なりき。

遊戯的精神を失って緊張味のある寄宿、これ曾っての我等入舎当時の舎の有様であり又今日のそれなり。此の緊張味ある舎風を永く保ちたいものである。吾界大思想全集第一回配本、スペンサー「第一原理」配本さる。

四月二十三日 平戸君風邪臥床す。晴天、平野、笹部、彦坂の諸君案内の下に新入舎生七名円山方面に散歩す。帰途、福寿草の採集をなす。

四月二十四日 ぽか※※した暖かさ、和やかな風吹く。舎生八名藻岩山へ登る。中吉古君郷里の寄宿庄内寮へ移る。夕刻六時大谷君帰舎す。

四月二十五日 晴天、風なし

夜八号室において決算をなす。時田氏の応援を得て進行速かなりき。

四月二十六日 晴天、夕食頃、石橋君帰舎す。

四月二十七日 かわき切った街路、白砂粉が飛びて風呂帰りの足も灰色になる。来る五月一日の対尚志社野球戦をひかへてキャッチボールに、打撃に一生懸命の練習振り。

夜七時多勢君帰舎せらる。本日予科桜政会の歓迎会あり。彦坂桜星会委員沢山の菓子をせしめて帰舎し、我々に饗せり。

四月二十九日 聖上陛下初の天長節なり、吾は諒闇中のこととて拝賀式も行はれず。

朝七時より予科グラウンドにて野球猛練習を行ひ、帰へりて見れば室替抽籤既にすめり。

本日は笹部三郎君の第二十一回目誕生日なり。食事部の心遣いよりなる赤飯をいただき、夜笹部君我等舎生一同を招待して御馳走さる。

五月一日 さあ起きろ※※※、今日は試合じゃないか、起きて呉れ、熱心なる運動部委員笹部氏の来週に眼覚して見れば、昨夜の雨からりと晴れ良好なる野球日和なり、対尚志社野球戦は朝六時より始まった。我軍の攻防甚だ良く毎回の得点に意気大いに揚り、七回ゲーム敵に僅かに二点の得点を許せしのみにして我軍十二点プラスAを得て勝利の栄冠我軍の頭上に燦然としてかゞやけり。午前十時頃、各室、室替を断行せり。夜、祝勝大コンパを開き歓談数刻の後解散せり。此頃の天気円山の桜咲き始む。

五月二日 ポン※※と静けさを破って響くテニスの音に眼覚めしか、午前七時の朝食には珍しくも座る席なきまでに食卓を囲めり。

食前の運動家の名を記せば左の如し。

赤岡、土井、笹部、彦坂、関谷、赤松の諸君。午後三時頃、野村君帰舎され、今度大学院学生となられし多勢君懐しの舎を退く。

五月三日 曇後雨

手拭を忘れて風呂に行き、番台から借りるのは非衛生的なるとかで、身体も拭ぐはずに服を着こんで帰り、又気持ちが悪いか云って二回も風呂に行った男がある。嘘のやうな事実さ、中川君らしくてよい。

五月四日 降っては晴れ、晴れては降り、いやな天気だ。今日から一週間、田中新内閣によりて臨時議会在が召集された。

五月五日 早朝五時舎生一同満開の花を円山に訪ぬ。帰りての味噌汁の味捨てがたし。

八時半頃から雨降り初む。明日、腎臓病のために退舎せらるべき小野寺君、夜七時舎生一同を四号室に招待して挨拶をのべられた。

五月六日 曇時々雨、小野寺君退舎せらる。

五月七日 曇天 好テニス日和。

歓迎会を兼ねて月次会を開く。晚餐会には先生及び鈴木、亀井、時田、多勢の諸先輩がお出下さる。

一、開会の辞 平川君

一、副舎長の挨拶

一、新入生の挨拶

土井君、赤松君、田島君、川原君、大塚君、本間君、関谷君、畑君及び本日入社せられたる予科一年（農）後藤源太郎君元気溢れたる挨拶ありき。

一、舎生歓迎の辞及び自己紹介

一、先輩のお話

一、先生のお話

一、閉会の辞 平野君

歓迎の辞の際、本日帰舎されし莊保君の支那旅行談あり、興味深きものあった。閉会后へボヌキに移り、多勢、亀井の先輩加はりて両軍大奮戦、二対一にて東軍の勝利となった。その後、寄宿舎のことにつき種々相談あり、又赤岡君より病気のため退舎の余儀ない事情を述べられた。赤岡君の退舎にともなふ衛生部委員は笹部君の犠牲的精神により同君の兼任せらるゝこととなった。

解散せるは十一時過、月次会委員、平川、赤岡、平野、中川、彦坂。

五月八日 花曇り、大掃除する室もあり。

夜、赤岡君退舎。

五月九日 太陽の光も眩し、各室大掃除をなす。午後、狂風起りて砂塵蒙蒙、息するのも嫌だ。我舎創立三十年記念としてポプラの苗を舎の西側に植える。

五月十一日 雨、春？冬？着物一枚重ねる程の寒さ、夜六時十一号室にあつまりて莊保君の御馳走なる菓子を頬張る。

五月十四日 午前中のよい天気ですっかり気をよくして平戸、中川、赤松の三君定山溪へキャンプに出掛けた。しかし午後二時頃から気の毒なことに雨になった。

五月十五日 曇 午後、元気な顔して平戸、中川、赤松の三君帰舎。午後七時の汽車で土井君函館へ行かれた。

五月十七日 晴天 風なし

W. グリフィス氏の講演があった。氏は明治初年我国に初めて科学なる学科を置き、而して当時の知識階級即ち漢学者（政治家をも含む）蘭学者なる階級に一階級を加へたる人である。演説の要旨は如何にして健康をうるか、かるが為には禁酒・禁煙、大食を禁じねばならぬと。



五月十八日 午後二時半より中央講堂にて芥川龍之介氏及び里見惇氏の講演あり、芥川氏はエドガー・ポーの創作対処論や、その人を紹介せられ、里見氏は漫談のうちに所謂まことの「真心」について話された。

五月十九日 大学文武会が真駒内遠足を催した。初夏のやうな暖かさで集まった者二千人余。

五月二十日 昨日の今日といふので休みを期待して舎に残ったが、誰も帰って来るものがない。授業が二時間あったとか。

五月二十二日 曇天で風あり砂塵を捲く。

遠足しても気分があらはれずとなして運動部主催の野幌原始林行を中止した。

先輩矢口君から御菓子でもと云って送って来たマネーで、心添へにあまへ五号室に一同会して御馳走になった。

五月二十三日 風、雨を含みて冷さ身にしむ、

冬に帰ったやうだ。朝、土井垣君帰舎せらる。夜決算をなす。予定通りに安くあがった。

五月二十六日 北五條電車開通して便利にはなったが、やかましくて落ちつかぬ気分だ。

五月二十八日 晴 カッコウ鳥が鳴いて夏が来た。緑のローンも懐しい。

月次会、来賓としては多勢君独りで淋し。

開会の辞、石橋君、副舎長挨拶では新築鶏舎のことにつき報告された。

舎生演説、大谷君が今日見学した練乳会社、ビール会社のことにつき話され、莊保君の興味深き満州旅行談あり、笹部君が樺太の益として残物の処理と勤儉をあげ奨励論をとへた。多勢君が満州における日本の立場と題されて、種々の方面より批判立論された。

閉会の辞、赤松君。

会后菓子を頬張りながら舎のことにつき相談す。記念祭準備委員を作る事、宮部先生退職記念及び我舎創立三十年記念として記念品贈呈の事、休暇中在舎の人に対し食費を舎費にて補助することとし、舎費にて不足の際は全舎生の支出による事、以上を可決し、それからへボ抜きをして解散す。

五月二十九日 天気良く、笹部、彦坂、土井、関谷君等数名手稲へ行き、平戸君等の一行藻岩へ、石橋君等野球見物へ、舎に残るもの中川、畑、平野の三名のみ。

六月一日 早々六月になった。閑古鳥の鳴く音も淡い哀しみをさそふ。午後七時三十五分の汽車にて柴内君が徴兵検査のため郷里盛岡に向け出発せられた。

寄宿舍創立記念事業や、宮部先生への記念品贈呈などに関して、野村、平川、笹部、平野の四氏が委員にえられて、本夜第一回の会合を開いた。懐胎中の賄婦は本朝、大学病院に行き、夕刻女兒を分娩した。

六月二日 雑誌「牧笛」を発行す。

映画研究会の第三回の会が丸井記念館で催される筈のところ、営業か研究か不鮮明の態

度のため警察より中止を命ぜられた。雨の降る中を御苦勞にも行かれて損した舎生が五、六名程あった。

六月四日 予科対高商ラグビー戦、十三対〇にて予科勝つ。生き※※した歩取りで彼等は行った。石狩河畔へキャンプするために。

彼等とは笹部、土井、中川、赤松、関谷、畑の諸君である。彦坂、平野の両君は盛岡中学修学旅行隊を案内して歩いた。

六月五日 三時過、石狩へ行った連中は元気な顔で帰へって来た。朝からの天気ですっかり気を良くして平戸、川原の両君は今朝から始った富貴堂主催の朝起奨励円山登山会に入会し、四時半頃起床した。莊保君は七時頃島松へ、平戸、本間、大塚の諸君は九時頃ワッツへ鈴蘭狩りに出かけた。彼等の帰舎せるは五時頃、未だ花の咲いたものがなかったと。

六月六日 午後一時から中央講堂で南、宮部両先生への謝恩式が開かれ、式後第一農場に於いて園遊会が催された。天晴れ、風無く、しるこを召す先生の顔もはれやかだった。

欧州戦争当時、太平洋諸国を恐れさせた独逸巡洋艦エムデンの第二舂が独逸練習艦としてはじめて我国を訪ひ、目下函館港に停泊中である。その軍楽隊の演奏会が中島公園旧式場にて催された。集へるもの約一萬、恍惚として妙なる音にみせられた。

徴兵検査のため郷里盛岡に帰へられて居た柴内君が今夜の急行で帰舎した。第二乙種合格なりしと。

六月七日 心持のよきを誘ふお元気に釣に出掛けた人があった。收穫はウグイやらドゼウを合せて十四匹。

六月十日 お産のため大学病院に入院中なりし賄婦が、その子をつれて帰ってくれた。

六月十一日 天晴れ気持よき野球日和。

予科軍、小樽高商を迎へ戦ひて利あらず。

十対四のスコアにて彼に名をなさしめた。

午後七時から中央講堂で文武会音楽部の第七回発表演奏会が開かれた。我舎及び先輩の出演者、平川、野村、多勢、奥田、佐々木諸氏。

六月十二日 富貴堂主催の早起会、今日は太陽礼拝デーとかを催し、余興として宝さがしをなす。

会員、赤松、川原の両君、午前三時半頃起床して参加せられ、サイダー、ビールを探しあてたととか。

本日、当札幌市における学生寄宿中の庭球の雄、埼玉寮を迎えて戦ふ日なり、我軍朝五時半頃より軽き練習をとりて彼等を待つ。彼等集りて先づ練習をはじめ。洗練されたる打球振りに我軍いさゝか度胆を抜かる。戦績左の如し（戦績表略）

敵軍、大将を先峰に、副将を三番目に、参将を二番目にして我軍をシャット・アウトせんとの戦法に出でたり。我軍土井、平野組、敵将吉田兄弟組にあたる。奮戦数合、ジュース、アゲインを繰返へすこと数回、しばしば敵を危地に陥し入れしも勝運遂になく三

対一にて惜敗す。次に出でたるは大塚、後藤の新進組なり、敵一勝に気持をよくし大いに活躍す。大塚組初陣にいさゝかあがり遂に敗れたり。

原、小島組――平戸、莊保組

敵将原、バックハンドを得意とし、我前衛を衝くの戦法に出る。莊保君よく戦ひしも遂に利なく三対二にて敗る。

原・小島組――石橋、柴内

勝に乗ぜし敵軍、我が石橋、柴内組をも敗らんものとして来る。我が石橋、常とは異なり自重してネバリ、柴内君機を見てスマッシュよく、敵軍具うべき作戦を知らず。

福木、吉永――石橋、柴内

柴内君よく奪ひ、石橋君またよく戦ひしも、敵は名に負う老巧なり、三対二にて石橋組惜敗す。

福木、吉永――笹部、彦坂

我軍の大將組、笹部、彦坂望を負ひて立つ。彦坂君大いにあたり敵軍恐れをなす。

スコア―は三対二なれども我軍楽に勝つ。

敵軍、新井、矢部組、卜部、三上組取るに足らず、笹部、彦坂組楽に勝ちて、敵の優退組にして大將なる吉田兄弟組にあたる。

笹部君愈々よきあたりを見せ、彦坂君亦よく活躍し、敵前衛ミス多く、勝利の栄冠我軍に帰す。我舎の対寮庭球試合に勝てること大正十二年和歌山進修学舎に勝ちてより初めての勝なり。

試合終りて食堂にて菓子をはゞばり、茶をのみ、しるこをすゞりて彼等と歓談す。

本日午前九時より弘前高校対予科の対抗陸上競技あり。予科軍四十七点五分の二、弘前高二十七点五分三にて予科大勝す。

大谷君の誕生日を祝して食事部の心づくしなるチキン・ライス？を食ふ。

六月十三日 曇天、時々細雨

二、三年前よりの懸案なりし庭球ネット張金具を取りつけた。昨日は多忙なりし大谷君は誕生日のお祝を今日に延して、午後七時頃四号室へ舎生一同を招待し茶菓を饗された。

六月十四日 晴

今日から札幌神社大祭、創成河畔は興行物の見物人で一杯だ。夕食ハヤシライス？

六月十五日 札幌神社の祭のときといへば、毎年雨が降ったり然らずんば曇ったりするのを例として居たが、今年はまだ稀に見るよいお天気だ。田舎から出て来るものやら何やらで街が雑沓して居る。若葉薫る此頃、中島公園で仏蘭西美術展覧会が開かれて居る。舎の人の見に行く人も多い。

お祭なので食事部では夕食に赤飯、鶏少々入れた吸物、ビーフステーキをご馳走して呉れた。

六月十六日 今日よいお天気だ、お祭興行物の太鼓の音に今日も雑沓を想像される。

沢庵漬を買いたいと副舎長に願ったが、外の安いもので間に合はせろと云はれた食事部委員中川一郎君、つむじを曲げて昨日から食事時に漬物を出さない。舎生の不満の声洩れる。平野氏、食事部委員にその非を諭す。平戸副舎長止むなく沢庵漬を買ふことに賛成し食事部委員中川氏の作戦うまくあたる。文芸部委員、我舎創立三十年記念事業の一たる出身者名簿作成に着手す。夜、水産製造一年佐原武雄君入舎す。

六月十七日 雨降るみ降らずみのお天気。

中央講堂において尾崎行雄氏の政治教育講演あり、現在既成政党の腐敗は選挙人自らがしかさせるものなると選挙人の自覚をうながす。

六月十八日 月次会をもつ、委員、野村、土井、畑、川原、後藤の諸君

御馳走 すし（五目）鮭フライ、オムレツ等

奥田、時田、多勢諸氏の会食あり、晚餐会后漸く憩ひてより会を開く。

一、 開会の辞 畑賢二君

二、 副舎長挨拶

先づ新入舎生佐原武雄君の紹介をしてより、自然礼讃の感想を述ぶ。

三、 佐原武雄君挨拶

身を修めて後、隣人を修め而して後、国を治む。水産専門部の改革は自己の望み為さんとする所のもの、先づ身を修めんとすと挨拶す。

四、 舎生演説（指名、時間三分間）

土井君。現在の舎を観察するに、唯学に生存せるに過ぎざる如くで、眞に生きて居るとは思はれずと。

笹部君 時間三分間と制限され居る故、述べ尽し得ざるを恐るとアツサリ退く。

後藤君に次ぎ柴内君、例のユーモアたっぷりの話し振り、満場洪笑。

石橋君。中学時代の失敗談を述べ退く。

平野君。我々は大学現在の教授法の大多数に不満を抱く。不満の原因、それは眞実に、熱心に教へるといふ事なくして唯、単なる古くさいノートの朗読であり、自己の生活に従つての迄の教へ方と思はれるからだと言き、その教授法改善につきて述ぶ。

大谷君。自己の充実して後他の観察すべしとして、見学旅行に対する注意を述ぶ。

平川君。寄宿生活において、親しき中にも礼儀あるを望む、他人の揚足取り等に心を入れては不可なりと。

野村君 アツサリと片付け、中川君出場、今の我々の時代は書くよりも聞く、話すよりも聞く時代で今は述ぶべき時ならずと。

田島君。中学時代のボートの歌をうたひて、ホームシックの高潮せるを漂す。

莊保君。指名に対して反対を述べ、席上漫談して退く。

関谷君。国に団結を欠き、又我舎にもその風あり、団結を望むと。

本間君、赤松君、大場君、彦坂君、梶浦君アツサリと片付け、最後に川原氏出で

予科は居候の養成の場で、学科も面白味なしと罵倒して教授に対する不満を述ぶ。

笹部君飛び出し、教授に対して不満を述べるは不敬千萬なりと叱咤す。而し其れに対して何等極め、論ずる所もなし。

#### 五、先輩演説

多勢氏、前舎生演説に対し、学生時代に体験した自己の立場より、それを批判し、告諭するが如くに述べる。

時田氏、「俺は若いんだ、俺には成長があるだ。俺には進歩があるんだ」と冒頭し、人生の行路には幻滅がある。幻滅の究極をつきつめよと述ぶ。

奥田氏、舎生演説に対し批判をなす。

笹部氏、寄宿舎は自分の家庭だと思ひ、壁の破れは手づから修繕するだけの心持ちをもってもらいたいと。

亀井氏。自分は三十代の人である。三十代の人達の長所をとり、三十なる時代に生きようと思ふと。

#### 六、宮部先生のお話。

舎生演説を批判し、弁者を諭す。

#### 七、閉会之辞 野村君

時既に十一時半を過ぐ。先生帰宅后、先輩諸氏と基本金の事並びに先生への記念品贈呈について懇談す。

#### 委員改選の件

食事部委員を二名とし一ヶ月置き又は前半期と後半期とわけ一両委員の相談による一何れにしても責任をもって事務を行ふこと、平川君より提案あり、満場一致可決。

六月十九日 早起健康会第一期終りて先づ、川原君にレター・ペーパー並にハンカチーフを、平戸君にがま口をハンカチーフを賞として与へらる。

六月二十日 賄婦出産三週間目の祝として、赤飯としるこが舎生一同に賄より饗された。

六月二十一日 野村、平川、笹部、平野及び平戸副舎長特別室に集りて我舎の記念事業のこと及おび宮部先生への記念品贈呈に関し、先輩に通知すべき文につき協議す。

六月二十二日 本日決算。一日金六十五銭。

六月二十三日 義満寿館に本日より上映の名画「ホテル・インピリアル」及び「ウィンダミヤ夫人の扇」を見に行ける舎生多し。

六月二十四日 予科試験日割発表さる。七月四日より九日までの由。舎生緊張して頑張り始む。新聞は先日来つづいてきた小樽船場労働者の大同盟ひ業は最高潮に達し、ひ業人夫二千人以上なるを伝ふ。

六月二十六日 昨夜の雨カラリと晴れて心地よき陽の光を仰ぐ。東北大学対北海道大学とのア式蹴球戦試合あり、五対〇にて北大敗る。午后四時より北大予科対東北大学との試合あり、二対〇にて予科勝つ。

六月二十八日 ヨカボーイ試験切迫のため緊張す。先輩梅津氏（今駒場農大助手）北海道旅行の帰途、来舎さる。時田氏、多勢氏土井久作氏等も来舎され歓迎会を開き、自己紹

介をなす。苺を皆で食ふ。十一時解散。

一昨夜より出現せるウィンネッケすい星、屁の如くに姿を見せず。好奇心旺盛なる舎生を誘惑して、試験勉強の妨害をなすこと甚し。星の降る様な晩なれども、月の直径の三倍もあるてふ慧星（但し三等星位の光数なり）が見えぬとは残念至極なり。

六月二十九日 うらゝかな朝だ。中川、平野両君朝の急行で帰省。

閑古鳥が二、三声鳴いたが、もうあまり感じが出ない。テニスコートの傍の白いアカシヤの花が蒼空に映えて美しい。ほんとの北海道の夏らしくなった。午後は水が恋しくなるほど暑かった。

夕食前、笹部君が外から帰ってきて日蝕だといふので、餓えて拍子木のなるのを待ってた連中、それとばかりに外に飛び出し観測した。中にはオテントウ様の罰で目を傷めたものもあった。薄暮より猛烈なガスがかゝって憂うつな風景を展開した。「白夜」というのもこんなではないだろうか。

高女通りの土木工事のモーターの響と、池の蛙の声が混合して絶間なく響き、試験におびへてる男の神経を震はせる。

六月三十日 猛烈に暑し。曇ったり晴れたり。

巖鷲寮〔岩手県人会〕創立委員長葛西教授、寄宿舎視察のため来訪さる。舎の第一印象は陰鬱ださうだ。廊下が薄暗いためだらうか。

数多くの後悔を残して六月が去ってゆく。

だが希望に充ちた七月がやってくるのだ。

“うつろひ易き若き日”をより充実させて送りたいものだ。

七月一日 細雨煙る。朝八時の汽車で石橋君天塩の演習林にゆかる。今日から予科は臨時休校なり。皆緊張してる故ならん、舎内頗る静粛なり。

七月二日 雨降りみ降らずみなり。ヨカボーイ大いにガンバル。夕方電燈がつかなくて、七時半頃やっと灯る。平戸、平川、笹部、野村の四君、寄附金の事に関して先輩、北村氏を訪問せり。

七月三日 晴天、頗る暑し。午後六時よりエンゼル館にてアムンゼン氏講演会（池田林儀氏通訳）あり、舎生の中で行ける者多し。

“受胎告知”富貴堂より来る。

七月四日 予科試験始る。今日の結果は幸にしてコンディをとりたる者はなき様なり。

晝食は食事部の心盡しの卵がつきたり、感謝なるかな。

七月五日 正午頃大雷雨ありたり。壯観なりき。夕方晴る。

七月六日 梶浦君正午の汽車で帰省さる。笹部君晩の汽車で洞爺湖方面に旅行さる。

七月七日 笹部さんの所から桜桃一籠を贈られ夕食の後に食ふ。赤松君手稲山ヒュッテに泊りにゆかる。予科工科三年の試験終る。

七月八日 予農一年の試験終る。田島君午後七時の鈍行で帰省。夜笹部君帰舎。やっと夏休みらしい気分が充ちて来た。停車場は白線の真白な少年共で一杯。皆オッパイに渴え

たような顔をしてる。

七月九日 本間君正午の汽車で帰省。午後三時手稲ヒュッテより赤松君帰舎。河原君午後七時の汽車で帰省。平戸、笹部、大塚、関谷の四君、元気旺盛にて大雪山（ヲタクカムシュッペ）踏破の途につかる。舎の人員増々減少してそぞろに寂寥を感じしむ。

七月十日 午後時田さん来舎。テニスをして帰る。平川君午後九時四十四分の汽車にて牧場へ。同じく九時五十分の後藤君帰省。

同十二時ので土井君奥地へ向っての大旅行に出発す。

七月十一日 畑君午前七時半の列車にて帰省、午前十二時のにて彦坂君帰省せらる。これでいよ※※舎生合して五人、静寂そのものの如し。今日は非常に暑かった。夜食事部で「さくらんぼう」を買って食ふ。現在舎生の使命を左に記す。

大谷、野村、莊保、佐原、赤松君

又左に大珍事を記す。

めづらしくも大谷君が夕方になって、なんと思つてかテニスをやると云ひ出した。

此機いっすべからずと、おだて上げてとう※※白じゅばんにズボンという出立ちでテニスコートに引き出す。自称生れて初めてのテニス、思うようにはあたらず。あの体にあせたく※※。皆から赤穂義士だとか、「少しはヤセタぞ」なんて云われてエヘエへ笑っている。然るに何ぞ知らん。動かぬが中々よくあたる。これぢや近い中にテニスの選手になれそうだ？、とう※※へばつてはだかになりたいなんて云ひ出す。七時頃無事に終ふ。生れて初めての猛運動に余程あつかったと見へて、さるまた一つで舎の中をのっそり※※※あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、ふーふー云ひながら歩き廻っている。

七月十三日 午後より雨となる。寂しい。雨がしと※※と降る音、夜に入って止まず。

舎内せきとして声無し。ぼた※※.....。

屋根に落ちる雨滴、しゃり※※.....暗黒の中を歩む下駄の音、すべては淋しさを増す音のみ。雨の夜は更けて行く。遠く思ひは馳する故郷の父母、淋しい晩だ。

七月十四日 午前四時半札幌着の汽車でヌタクカムシュッペ行の四名帰舎、元気其のものゝ如くフラ※※と夢見る心地でヨロ※※と入り来つた様、目に見る如し。高山植物、岩魚、やまべ等沢山、但し皆山の案内人につつてきてもらつたらしいのを持って来た。

夕方平川君の弟さんが来舎、歓迎会を開く。

七月十五日 佐原君実習地へ出発、午後より快晴となる。午後九時五十分の汽車で笹部君東京に帰着。

七月十六日 午後より曇天となる。此の日舎生四、五名がマツカリヌプリへ登る日であるのに此の天気では皆ためらふ。夕方少し明るくなったので愈々出発と定まる。一行の人員を記すれば平戸、大谷、野村、関谷、赤松の諸君。七時三十五分ので札幌発、大塚君一人舎に残るのみ。

汽車は暗闇をついて進む。具知安にて3人ばかり降りてプラットホーム内のそば屋でそばを食ふ。但し大谷君は食はなかつた。

比羅夫着、暗いホームに降りいよ※※カンテラの光を頼りに進発、雨さへ加はる。

七月十七日（日） 社務所を發しいよ※※やまにかゝる。中々急な岩を登ったり谷を上ったりすること二十町あまり、五合目に達す。

この時以来一行中のある人（大谷氏）が、すっかりへばってしまつて十歩行つては休み、二十歩行つては悲鳴を上げる始末、ついに体に皆の手ぬぐひをつなぎ合して胴にしぱりつけて二人で引いた。雨と戦ひ、言語に絶する苦しみを経て、普通四時間のところを五時間半にて九合目の石台に達す。

九時半大谷、赤松は直に比羅夫に下山帰舎し、後の平戸、野村、関谷の諸君は洞爺湖に下る。大塚君午後九時半ので帰省。

七月十九日（火） 平戸、野村、関谷の諸君旅行より元気で帰舎。平戸君食慾不振、不眠病にかゝつたとコボしている。リーダーすっかり駄目になつてしまつたようあ。

七月二十日（水） 関谷君七時三十五分ので帰省。

七月二十二日（金） 七月の決算あり、時田氏手つだはる。

七月二十三日（土） 朝大谷君友人と共に旭川狩勝方面へ旅行へ向ふ。

七月二十四日（日） 午後二時の汽車にて野村君帰省。時田氏テニスのため来舎。夜大谷君等帰舎。

七月二十五日（月） 土、日、月とかけて連日の快晴のため暑さ加わる。夕方時田氏テニスするため来舎。大谷君等登別温泉へ出発。

七月二十七日（水） 大谷君等登別より帰舎。

七月二十八日（木） 宮部先生午後九時の急行上りにて仙台學術會議へ御出になる。

八月一日 夜平戸君帰省。

二日 赤松君早朝支笏方面へ約一週間の旅行に出発。

三日 平川君帰舎。

六日 平野君帰舎。

七日 赤松君帰舎。

十日 平川君令弟能登へ出発

十四日 午後、我舎の先輩小野栄治氏来訪され笹部義一氏と夕食をともにされる。

十七日 夜平野君岩見沢に行かる。

二十日 夜平野君帰舎。赤松君急に里心付いて九時の急行で帰省せらる。

二十三日 夜柴内君帰舎。

二十四日 朝大谷君京都に向けて出発。

二十五日 午前八時柴内君演習林、音威子府に向け出発。夜平川君令弟と共に帰舎。

二十八日 朝畑、大塚両君帰舎。夜後藤、本間両君帰舎。

二十九日 夜平戸君帰舎、舎もようやく賑かになつた。

三十日 晝彦坂君帰舎。シト※※と降る雨の音が眠気を催させる。夜平戸、平野、畑、本間君等宮部先生のお宅に行った。



九月三日 もう早やいつとはなしに秋らしくなった。シャツの上に学衣を着て丁度よいくらいの涼しさだ。街中で焼くトウキビの香りも高い。夜樋浦氏帰舎す。

五日（月） 秋らしき気持ちのよい朝。関谷、川原両君帰舎せらる。午後、樋浦、平戸、関谷の諸君及び我輩は第三回北海道美術展覧会を見に行く。日本画にはよいのがあったけど洋画には残念ながら名画を見出し得なかった。夜土井君帰舎。

六日（火） 庭球部で金網を作り始む。帰舎するものなし。

七日（水） 晴天、午後彦坂君小樽へ。夕方多勢君来り、皆散歩や風呂に行っていなかったの、土井君と二人でテニスをやる。

八日（木） 夕方五時の汽車で赤松君帰舎。九時半で笹部君帰舎。大分賑しくなった。

十日（土） 今夜は十五夜の月見えなれども雨のため中止。夕食後食事部の心盡しで食堂でトウキビ、マメ、林檎、菓子を噛りながら雑談す。三号樋浦君都合により退舎せらる。退舎記念として図書二冊を寄贈せらる。

杉本良次君より図書四冊の寄贈を受けたり。

十一日（日） 夜来の雨晴れたる故池の掃除をなす。或は草を刈り或は池の流木塵芥を引上ぐる等皆よく働きたるは、舎の為によろこばしき事なり。皆、溝渠の如く悪臭をも厭はずに奮闘す。晝食後はコート of 修理及び朝の仕事の残部をなす。夕食後食堂にて慰労会をなし、大いにトマトその他を平ぐ。柴内君帰舎せらる。今夜は十六夜なれど雲に妨げられて興なし。

十二日（月） コートの修理をなす。“楓林”の原稿用紙をくばる。よき創作の集まらん事を！夕方多勢君来りてテニスをやって帰る。

十三日（火） 夕方大谷君帰り来る。夜平戸、笹部、土井、関谷の四君多勢先輩の下宿にレコードを聴きにゆきたり。月光さはやかにして正に秋冷の候なり。豊平川畔を十一時頃まで散策す。

十四日（水） 朝佐原君帰舎。豚八仔を安産。中五匹を踏み殺せり。

十五日（木） 朝田島君相変わらずの顔付で帰舎。帰らない人はあと四人のみ。食堂賑し。

夜、三友館に「宇宙の驚異」を見にゆく。

十六日（金） 今朝の新聞によれば京浜地方に大暴風雨あり。被害甚大なる模様なれども、幸に、実に幸に、舎生中に被害者なきはよろこぶべき事なり。夜莊保君相変わらずの賑かさで帰舎。クルミの落つる音かまびすし。頑童等池を汚す事甚だし。

対Y・M・C・A・Dとの庭球戦近づきしため皆大いにテニスの猛練をなす。

十七日（土） 北海道特有の秋雨屢々通り過ぎて、傘なき男を脅威す。笹部、土井、関谷、畑の四君三角山に足ならしに行く。夜五号笹部君の部屋で西瓜等を食いながら懇談す。芥川龍之介を購入せり。

十八日（日） 朝からコート of 横の金網をはり、三時頃終了す。吾人のイカンに思ひしは健康なる舎生の總動員せざりし事なり。お互に困苦を分けて、初めて共同生活の意義があるのではないだろうか。金網製作等に関し終始一貫奮闘せられたる運動部長彦坂、笹

部の両君に深き感謝の意を表す。

学校のグラウンドにて川原、畑、本間、赤松君等陸上競技の試合をなし、遂に川原君優勝せり。

十九日（月） テニスコートに赤土を入れて手入れす。雨天のため練習中止。今学期の居室の組合せ左の如く決定せり。（略）

彦坂、土居両君本舎を代表してY・M・C・A・Oにゆき来月二十四日午後二時より五組で試合する旨を協議せり。把鋏寮との試合も二十四日の午前なり。

寄宿舎の池に下水工事中、下水の水を入れたから出口がなくて（之は請負師の怠慢のためなり）遂に氾濫し、付近の家は水に浸されて大こぼし。かゝる事に至らざる以前に副舎長が抗議を申し込んだのであるが、市役所の不誠実のためかゝる事を出来せるは遺憾である。前古未曾有の大氾濫のためテニスコートが危くなったので、笹部、彦坂、土井三君カンテラとローソクの光をたよりに土を運び、防水工事をなす。赤松君も途中より手伝ってくれて大変助かった。

時は正に十時半であった。

二十日（火） 朝練を六時より始む。部屋の決定の抽籤を行う。（下駄箱の抽せんも）

赤松君を通じて実科の把鋏寮に庭球の挑戦なす。敵直ちに応諾して、敵の大將らしきもの偵察兼練習に来る。相当強き奴なり。

夢油断すべからず。我舎のメンバーは左の如し。

1 土井 2 石橋（後藤） 3 大塚 4 笹部 5 平戸  
柴内 川原（畑、関谷） 平川 彦坂 平野

早朝、鶏二十羽殺されたり。加害獣は判明せざるも犬かイタチなるべし。早速料理して夕食の膳にのぼし、引導を渡して腹中に葬る。非常に美味なり。或る茶目曰く「明日も亦殺されていればよいなあ」と。度し難し、度し難し。

二十一日（水） 朝のこ※※と小人がリュックを背負って這入って来たので此奴怪しいとよく※※見たら中川君が帰舎されたのだった。舎もこれであと二人帰ればよいのだ。

秋雨沛然として至り、テニスの練習は朝練のみで中止。夕食後は各部屋思い思いの室別コンパを行ふ。予科ボーイ明日は桜星会の臨時大会で第一時限のみが授業だから気分のんびりしてるのだろう。飲み且食ひ、笑い声と喚声の中に舎内の夜は更けてゆく。

二十二日（木） 石橋君、樺太の夏期労働代三百円也の夢破れた哀れな残骸を舎の玄関にさらす。本日第一限後、桜星会大会。

舎生殆んど全部、部屋換へ完了す。コートの手入れをなし、猛練をなす。皆調子が出て来たようだ。夜、平戸、笹部、平野君寄附金募集のため鈴木氏の宅を訪問せり。夜中島で花火大会あり、舎生の中で行った者もあった。

二十三日（金） 今朝大掃除を開始する部屋あり。三、四人の怠者の行動なるべし。試合切迫のため猛練す。ために肩を痛めた者二、三人ありたり。夜、盛んにガスがもれて、ために中毒を起しそうなので、土井、関谷良訓がスピード・ウォーキングで東四丁目の

ガス会社まで交渉にゆきたり。

二十四日(土) 田島君、支笏湖に友人と行きたり。九時より把鋏寮との庭球試合を行ふ。戦績は左の如く惜敗。(略)

敵の大將組佐藤、寺本は実によいプレイヤーだが、スポーツマン的なスピリットに欠けてたのはよくない事だ。技術はさすがに吾人の及ぶところではない。彼(佐藤)一人のために一前衛寺本はあまりうまくない一青寄は敗れたわけだ。試合後、前庭で茶菓の饗応があった。

午後二時よりY・M・C・Aのコートで第三回庭球戦を行ふ。石橋君頭痛のため出場不能となり平川君後衛となる。戦績左の如く、遂に我軍の勝に帰す。(略)

此の日午前は無風であったが、午後は風がつよくて特にY・M・C・Aの濃一とは北風にあふられて非常にコンディションが悪かった。平川、畑組が敵の先鋒で大將なる林、田中組を三対一で破ったのは実に当日の大功績だった。平川君のキリ球には林さん大いに悩まされて滑稽なほどだった。Y・M・C・Aの名手古川君が病気でいなかったのも、大分メンバーの編成に苦心したらしく、森川、佐藤組は初めてラケットを握ったとかいうような人達で愛敬があった。

我舎の御大笹部君は此の日、医科の庭球リーグと両方かけもちでやったので、ゲームする事、正に八回でY・M・C・Aとの対戦の時は大分疲れが出て、若干辻君(彼は相手が強い程よいという変な性格の所有者)のために、三対二で苦戦して勝ったのは気の毒だった。試合後にY・M・C・Aの食堂ライスカレーや茶菓の饗応があり、お互に自己紹介をやった。大学のコートでは都市対抗庭球戦があり、小樽組はアムパイヤーに不満で退場し、**■極夕張対名寄となり夕張優勝す。医学部のリーグ戦は三年目が優勝したそうさ。多忙なりし今日の一！！**

二十五日(日) 運動部主催、吉例の手稻登山を行ふ。参加者は平戸、平野、笹部、土井、彦坂、畑、川原、大塚、本間、赤松、関谷、及石塚(舎外生)の諸君なり。七時四十八分の桑園発。光風館より路をとり、風景を賞しつつ、第一、第二.....とピーク伝ひに登る。十二時十分前頂上着、落後者なかりき。一時頂上発、沢を下りてヒュッテに至り、茶菓を食ひ小憩。四時三十四分の汽車にて軽川をたち、舎に帰りて直に夕飯を喫す。

七時より独立教会にて内村鑑三氏の説教あり。舎生中五、六人聴きにゆきたり。欧米の基督教の墮落を嘆じ、まだ日本の方が脈があると論ず。老ひてます□□盛んなる氏のために祝福あれ。野村君殿を承ってこの夕に帰舎された。

二十六日(月) 大掃除を行ふ部屋多し。

シンシナテ大学文学部長チェンドレン氏の講演中央講堂にて二時半より、渡辺盛衛氏の「西郷南州先生の功績」なる講演とありたり。又フィッシャー氏の講演は医科講堂であった。内容はコロイドに就いて。

この二、三日来晴天のため、星光清し。

二十七日(火) 大掃除を行ふ部屋二、三ありたり。午後二時半より中央講堂にて内村鑑

三氏の講演ありたり。聴衆室に溢れ盛況なりき。内容を略述すれば、須く志を大とせよ、Ambitionのある者は、たとへ老人でも BOYS であると、BOYS の定義を下し、最後にクラーク氏の再現として我言を聴けと、BOYS BE AMBITIOUS を叫ばれて降壇された。時間約一時間半。

秋田北盟寮より四周年記念庭球大会の招待状来る。六時半より決算、一日約七十五銭、なりき。田島君、夜帰舎。

三十日（金） 発火演習の編成のため第一時限から大三時限までグラウンドでたちん坊せり。近時天候実によし。

石橋君退舎せらる。君は舎の遊戯派の御大として、実によくその技を発揮せられたり。

君の下宿は北七、西五、昌平館内。

十月一日（土） テニスの練習をなす。風強くて意の如くボールの動ざるはイカンなり。本日、9月の月次会を行ふ。委員、笹部、莊保、田島、関谷、佐原の諸君。五時半より晩餐会、インディアン・フィッシュ、フーカデンビーフ、その他御馳走に満足。七時より月次会を開き、先生及前川十郎氏、時田郇氏来舎せらる。田島君まず開会の辞を述べ、平戸副舎長、夏季休暇中の舎内の傾向等、所感を述べらる。土井君、雌阿寒岳に於ける感想述べ、日本人が自然を愛しないのを悲しむと結論す。莊保君、休暇中の樺太旅行を語られ降壇、次に佐原君、舎生が時事問題、特に政治聖濟問題に冷淡なるを慨すれば、土井君又飛出してバク論し、更に佐原君バク論す。この所、正に討論会の感ありしを平野君出でて問題をそらし、見学旅行及それに附随しての漫談をせらる。笹部君、同室二人の共同して楽しき生活をすべき事を述べらる。次に先輩の御話にうつる。

土井久作君、千島の植物採集旅行の話をせられる。中々面白く有益であった。時田君「つまらぬもの」と題して話され、他人がいくら「つまらぬ」と非難しても、自分で「つまる」と確信したならば、それに邁進すべき事及び「つまらぬもの」に「つまる」ものを発見するのが吾人の義務であると論じて降壇せられた。次に宮部先生立たれて、学生時代は大いに旅行すべきである事、及先生の学生時代の思い出話、内村鑑三先生との同室時代の逸話等と話され、よく共同してゆける舎生は社会に出ても成功すると述べらる。大変面白く有益であった。笹部君の閉会の辞で会を閉じ、菓子を食べながら又先生や土井久作君等を中心に話がはずんだ。へぼ抜き、腕相撲をやり十一時散会。十号室で明日秋田寮で行なはれる試合の作戦計画をなす。

十月二日（日） 九時より秋田寮にて秋田舎外生団と戦ふ事になり左の如き成績にて惨敗す。皆のコンディション悪く（前夜月次会で余りに騒ぎすぎためなるべし）且、烈風のためにかくも無惨なる敗をとりたるなり。

笹部 伊藤 土井 高安 大塚 富樫  
彦坂 石井 柴内 河田 平野 中田

折詰とタオルをもらって逃げ帰る。あゝ敗軍の将は兵を語らずとかや。大学のグラウンドでは予科対高商の陸上競技あり。予科軍断然おさへて三十六対二十一のスコアをも

って勝つ。実に三戦三勝の記録なり。

夕食後、野村君の買って来た葡萄を皆で食ふ。

十月三日（月） 大谷君一身上の都合にて退舎せらる。下宿先は南七西十 松田ハツ方、夕食後大谷君寄贈の菓子を食ひ、四号でコムパを開く。紅白両軍のテニスの組合せ発表さる。次の如し。（略）

十月四、五日（火、水） 予科の発火演習、厚別陸軍演習場にて行はる。舎生十名参加せり。富貴堂に七二、三七円也を払う。

十月六日（木） 慰労休暇。（但し予科、実科、専門部） 一時半より舎内庭球大会を行ふ。

先ずシングル戦をなす。途中にて秋雨至り中止。雨後コートの手入れをなし又行ひたれど又雨のため中止せり。戦績左の如し。（略）

十月七日（金） 午後二時半よりペンシルバニア大学保険経済学の泰斗ヒューブナー氏の「世界大戦後に於ける米国の――」なる講演、中央講堂にてありたり。昨日のシングル戦を続行す。本日の戦績左の如し。（略）

人員の集合状態悪しきため紅白ダブル戦は中止となれり。

十月八日（土） シングル戦を行ふ。

決勝戦 大塚－柴内

三・四等決定戦 彦坂－平戸

かくてシングルの選手権は柴内君の手に帰しぬ。それより直にダブルス選手権争覆戦を行へり。戦績左の如し。（略）

午後六時より丸井記念館にて医学部の講演会ありたり。満員なりき。

九日（日） 午後一時小樽花園グラウンドで予科対高商の秋季野球戦あり。五対三の接戦にて惜しくも敗れたり。常に敵を圧迫しながら遂に敗れたるは惜しみて余りあり。坊ちゃんの予科軍はスレッカラシの高商軍に比し、カタクになって実力を発揮し得ざるも原因なるべし。残念なり。

十日（月） 記念祭委員左の如し。

庶務、会計、接待、平戸、畑、大塚

饗宴 平川、彦坂、野村、関谷、本間、柴内

余興 笹部、中川、土井、田島、川原、赤松

装飾 平野、莊保、後藤、佐原

午後九時より余興部の委員会を九号室に開けり。

十一日（火） ダブルの続きをなす。戦績左の如し（略）

かくて庭球大会を終れり。

シングル □、柴内 □、大塚 □、彦坂、 □平戸

ダブル □平戸組 □笹部 □彦坂

柴内 畑 関谷

十二日（水）次第にピンポンが隆盛になりたり。テニスをやる者なし。

十五日（土） 時計台にて科学講演会ありたり。

講演者は田中阿歌麿、田村剛両氏なり。

余興部、芝居のセリフのプリントをする。

十六日（日） 八時八分苗穂発で運動部主催年中行事の支笏湖行をなす。参加者左の如し。

平戸、畑、莊保、後藤、本間、平野、大塚、中川、彦坂、関谷、笹部、平川、（石塚）  
舎の残留部隊は概ね試験のある人々ばかりなり。然しピンポンをやり、夜食に牛鍋をつついて雑談し、七時まで可留多をなせり。本日午後二時より本道場にて対高商第九回柔道戦ありたり。予科不戦十人を残して大勝せり。特筆すべきは予科伊沢初段が敵の黒帯三人、白帯四人を葬りて八人目の渥美二段と惜しくも引分けせる事なり。

十七日（月）秋雨しば□□至りて天候沈静なり。残留部隊皆朝寝す。今日は祭日なるためなれど、何のための祭日か、それを知れる者一人もなし。何たる非国民（？）ぞや。

しかしかく云ふ我輩もその一人なり。支笏湖にゆきたる面々空腹をかゝへて午後九時半に帰舎す。

十八日（火） 相変わらずの秋雨に腐る。舎の先輩笹田君来舎せられ六号の平野君の部屋に一泊せらる。余興部セリフのプリントを印刷す。今晚中川君の所謂 **Kameyo's accident** が「計画的」に而も突発的に発生し、怒る者、笑う者賑かなりき。しかれども、その真相は、その事に関係せる人々の名誉のために秘す。

十九日（水） 井戸の堀代へをなす。水の出悪し、豚小屋の設計等に関し相談ありたり。

二十日（木）ピンポンます□□盛んになる。

新聞によれば極光が表れたとか。

二十一日（金）午後二時より図書室の掃除、整理を行ひ、少し本棚を移動せり。夕食後その慰労会を一号室にて行ふ。水の出悪しきため二度目の井戸掘をなせり。今度は成功したらしい。

二十二日（土） 午後七時より決算を行ふ。本月は予定通り安く、一日五十四銭であった。

茶菓の饗応ありたり。実科、専門部の試験始る。

二十三日（日）食事部大根千三百本購入。各自七十本宛洗ふ事になった。故郷のシスターが見たら泣くだろうような光景であった。

「死線を越えて」「太陽を慕ふ者」購入。

赤松君の父君来舎、御土産のヨーカンを皆して食ふ。

十四日（月）稀に見る好晴。朝記念撮影をやるはずのところ写真屋来らざるため、明朝に延期す。ために、早起きせる朝寝坊連のグチ喧し。立松夫人独唱会、三友館でありたり。

二十五日（火）朝舎の前で記念写真を撮る。

二十六日（水）招待状のプリントを刷る。

陸軍の大演習中N三号爆破す。

二十七日（木）伏見宮大妃殿下薨去遊ばさる。

三十日（日）記念祭の準備で忙し。

三十一日（月）各部思ひ□□に密議をこらす。

装飾部では壁をはり始む。

十一月一日（火）漸次記念祭の近き来る、各人の動作の上に見る。夜亀井、多勢先輩応援に来らる。而して壁の塗り代へをなす。

記念祭歌のプリトを刷る。

二日（水）朝時田氏のオルガンで、記念祭歌練習。此の日、舎生の半数は休校して壁の塗り代へをなす。余興部では十二号に合宿して、一時半頃までかゝって式順、及余興のプログラムを刷る。“楓林”完成、慰労コムパ支出五十銭なり。

十一月三日（木）余興部では舞台道具の買出し及製作に朝中を使い尽くせり。

準備全くなる。

（「青年寄宿舍一覧附録」参照）

四日（金）皆気のぬけたような顔してる。学校へ朝飯も食はずに飛び出してゆく勤勉家もあれば、十時頃に悠然と起出で晝食兼朝食をとる横着者もある。

五日（土）図書室の整理で後片付け全く終る。

ストーブの抽せんをやる。舎の最古参、平野三夫君、愈々退舎される事になり、八時頃六号に集って懇談す。君は予科一年の時から今迄五年間舎のためにつくされ、特に記念祭には装飾部長として大奮斗され、常に舎の中心人物として活躍された功績は大である。君のために健康と幸福を切に祈ってやまない。

六日（日）平野君荷物を纏めて遂に退舎。六号へは笹部君移り、二号の莊保君が笹部君の後へ移った。平戸、野村、莊保の三君新製せる舎のメタルを持参して先生の宅に至り、贈呈し、先生が我々の贈物を非常によろこばれた由を報ず。晚餐は記念祭の慰労として牛鍋をつゝき、平野君最後の晚餐をとる。

七日（月）みぞれ降る。遠山脈は白く清く灰色の空に浮いて、そゞろに錦秋湧く。佐原君、自分の進むべき新路は法科であるとし、退学して京都に行く事を夕食の時述べらる。発出は未定。本日はソビエト・ロシア革命十周年記念日とか。

八日（火）みぞれ降る。本日よりストーブを取り付けた。石炭も購入（塚本より）。

記念祭状況の原稿書く。佐原君の荷物整理。

九日（水）あられ混りの雨時々過ぎゆく。三友館にてサッポロ・シンフォニー・オーケストラの演奏会ありたり。佐原君、午後九時五十八分の急行で南下せらる。彼の決心や悲痛にして、進むべき路に断乎として突進せられんとする心や壮なり。舎の残留部隊全部見送る。彼を幸に健斗せよ！！

十日（木）予科、実科、専門部、軍事教練査閲ありたり。

十一日（金）大学の軍教査閲ありたり。記念祭状況の原稿を半分書く。

十二日（土）第三時限より中央講堂にて元米国某大学総長ウィルテ氏の講演ありたり。  
十三日（日）めづらしく天気よし。雪を待ちこがれる男達のあるのに！笹部君二号に転室。  
十四日（月）雪ちらつく。遠山脈はぜんぜん眞白になった。ピンポン盛んなり。  
十五日（火）午後六時、三友館で「スキー映画と山岳講演の夕」（北大選手サンモリッツ派遣講演会主催）があった。舎生の大半出席せり。「スキーの驚異」（全巻）「アルバータ登山」後、槇氏の講演があった。彼は一見して謙譲の人であるという事が分る人だ・有益だった。  
十七日（木）彦坂君新築された巖鷲寮へ移るため退舎、彼は将来の中堅人物と目されていた人で甚だ惜しい。舎は之で十六人となった。  
十八日（金）莊保君の誕生日、十号室で土井君の誕生祝を兼ねてコムパを開く。  
十九日（土）土井君の誕生日。  
二十日（日）ある男、スキー靴が出来たと大事そうに抱えて歩き廻る。そして曰く「早く雪が降らんかなあ」。  
二十一日（月）夕食後決算をなす。今月は六十四銭（一日）なりき。  
二十二日（火）みぞれ降る。文武会の音楽会ありたり。  
二十三日（水）新嘗祭。マキシモウィチ百年祭、中央講堂にて。  
二十八日（月）月次会ありたり。晚餐は牛鍋であっさり済す。委員野村、赤松、柴内の三君。七時、宮部先生、北村氏、奥田氏、多勢氏を迎へて月次会に入る。赤松君開会の辞を述べ、此の席では皆赤裸々にならなければいけないと云ふ。平戸君の挨拶、笹部君の挨拶に次いで関谷君、勉強党を「腐ったカマボコ」と嘲れば、土井君、勉強党になりたてのくせに、そんなのは若い者にあり勝ちな嘲笑的な態度だと返し、皆、盛んにとび出し議論熱せり。  
北村氏野付牛支場長になられた告別の挨拶あり。宮部先生の学生時代の話ありて閉会す。  
二十九日（火）雪猛烈に降る。寒気甚し。スキーに恋してる男の初ころび＝初滑り。  
三十日（水）寒さ次第に厳し。新聞代、全集代を支払ふ。  
十二月四日（日）雪降りみ、降らずみなり。  
スキーに恋してる男は、夜舎の前のスロープで、ひそやかに滑り、ころんで得々として  
いる。  
七日（水）第二学期試験日割発表さる。  
十一日（日）試験近きため少しく緊張し始む。  
十二日（月）本日より予科は臨時休校。  
十四日（水）予科試験始る。本日奥田義正氏の結婚式ありたる由。  
十五日（木）夜行にて柴内君、釧路方面に見学旅行に出発。  
十六日（金）七時半、平川君予科少年の羨望の中に帰省。  
十七日（土）工科三年の試験終る。粉雪二尺余積る。予科少年のスキー初年兵三角山に群



をなしてゆくぞ愉快なる。

十八日（日）平戸、土井、赤松、川原の四君、舎の今シーズンの手稲山発登■（スキーによる）をやる。雪は粉状で良かったが、浅く積ったため、熊笹がかくれてないので、あまりエンジョイする事は出来なかったが、随分愉快だった。野村君から北海道特有の鮭料理物が送り届けられたのは感激である。

十九日（月）だんだんスキー熱が旺盛になる。寒気厳し。

二十日（火）本日ヨリ小生土井恒喜氏に代りて第三学期の文芸部を受持ち、日記をつける事とする。寒気厳し、昨夜は零下三十度になる。予科の試験終り、スキー合宿について相談あり。

月次会開く。先輩、時田、多勢、平野の三氏と共に牛鍋をつゝいて試験後のしづかな快い気分を味ふ。六時半より開会。以上三氏の外に亀井氏がお出でになる。先生は都合のため御出席なし。土井、笹部、莊保、畑、野村、関谷の諸氏交々立って漫談に時を過ごす。先輩のお話は、多勢氏のスキーについての注意、時田、亀井氏は家庭的なる事について、次いで舎のます※※家庭的であらむ事を希望され、吾々舎生得るところ大なりき。会終つて来学期の委員選挙にうつる。運動部、文芸部の委員は立候補す。

最後にへぼ抜きをす。昭和二年最終の月次会はこゝに終了せり。先生の御欠席は蓋し残念な事であった。柴内君午後十時、野村君午後五時、共に帰舎さる

二十一日（水）昨夜の寒気のために積雪五寸余り、朝早くより滑る者あり。明日よりスキーの合宿が始るため、スキーを停車場に運ぶ。午後より大吹雪となり電車は運転不能となる。しかし此の吹雪をついて、合宿の用意に外出する者多し。夜に入りて、さしもの大吹雪も終局せり。午前四時、土井君、午後七時半本間君共に帰省さる。

二十二日 黎明未だ遠き午前四時野村君、莊保君山岳部スキー合宿に出発、七時過ぎに到りて河原君、大塚君、赤松君、田島君、関谷君スキー部の青山温泉合宿に出発すれば、舎は全く物音静まりて残る者は副舎長以下四人のみ、昨夜の喧噪に較べて嵐の後の波無き海の如く夜の電燈わびし。

二十三日 朝依り割合に暖きが如く屋上の雪は盛んに雨垂れを落す。笹部君、中川君明朝の出発準備に忙殺せらる如し。

二十四日 今朝両君食卓に見受けられず、夕食後七時には柴内君も舎を辞して帰途に着き、舎に残れるは余と副舎長唯二人のみとなり夜の嵐に寂莫の気舎中に漂ふ。

二十五日 思ひ返せば恐れ多くも先年本日、先帝崩御あらせられ吾等臣民の萬感置く能はざるの日に当り、舎の玄関に弔意の国旗淋しく垂る。流石に師走の晦近くなりたれば物騒にして、賄爺長靴の盗難に会いたりと不平云うも道理、副舎長と各室の戸締り検閲を行ふ。

十二月二十九日 朝大いに雪積みていたり。

一日中、綿の如き雪降りつ止みつす。午後六時頃合宿から帰舎したる者数人を算し、又舎は人の気配濃厚となる。因みにドアを開かば、莊保君、野村君、大塚君、河原君、田

島君、赤松君、関谷君意気揚々たり。

田島君、即日午後九時五十分の汽車にて帰省さる。；

十二月三十日 昨日のつかれも忘れて皆三時といふに既に起きて、正月の餅つきをなす。

実に見事なものを作れり。午後三時半に行けるものあり。本日は恩人石澤先生の命日なれば、在舎生及び亀井、奥田、多勢の先輩と共に、しめやかに追悼会を催し個人の足跡をしのべり。深更雪霏々として降る。